エンタ目

■ ベルリン国際映画祭 ■

「子ども向け」先進の運営

仙頭 武則

世界三大映画祭の一つ、ベルリン国際映画祭は毎年二月半ばに開催される。私が初めて参加した三大映画祭も一九九五年のベルリン映画祭。プロデュース作『エレファント・ソング』（利重剛監督）がフォーラム部門に招待された。監督と主演の松田美由紀さん、同時上映となった『ｕｎｄｏ』の岩井俊二監督、主演の山口智子さん、豊川悦司さんたちと同宿になり、朝食から上映、夕食までチームのように行動した。最終日前日には「重要な知らせがある」との連絡に、その場所へ行くと、本選とは異なる受賞会場で「ＮＥＴＰＡＣ（最優秀アジア映画賞）」が授与された。

二〇〇〇年にはコンペティション部門にプロデュース作『独立少年合唱団』（緒方明監督）が招待され、新人監督賞に当たるアルフレート・バウアー賞を受賞。デンゼル・ワシントンやこの時初めて世界に登場したチャン・ツィイー、Ｕ２のボノに囲まれ華やかな舞台での受賞だった。〇一年は『クロエ』（利重剛監督）。コンペティション部門で招待された。

最も忘れ難いのは九八年、プロデュース作『林檎（りんご）のうさぎ』（小林広司監督）がキンダーフィルム部門に招待された時。現在はジェネレーション部門に呼称が変わっている。子ども向けと高をくくることなかれ。千人の子どもたちが九十二分の上映を誰一人騒ぐことなく静かに観賞し、上映後の質疑応答では全員が一斉に挙手した。文化、風習、感情、豊かな質問が続き、場内は熱気に包まれた。

2001年のベルリン国際映画祭。「クロエ」で招待され、登壇する筆者（左端）

ベルリン市内の学校では毎年、教員たちが映画祭と連携を密に取り、事前に作品を観賞し、作品選定するという。「子どもたちが映画を通して社会と世界を知ることが重要であり、物事に対し批評的なまなざしを持ち、議論できる人間になってもらうこと。それにふさわしい作品を真剣に選んでいる」と映画祭プログラマーたちは胸を張り「選考にあたり難解かどうかは議論にもならない」と笑った。大切な条件は「主人公が子どもであること」だけだそうだ。日本なら子どもに見せるとなれば物議を醸すこと必至の作品も多数上映されていた。「子ども向け」の意味、映画に対する接し方、考え方に強く感銘を受け、日本とはかけ離れている状況を危惧した。

あれから二十五年、あの闊（かつ）達な子たちが三十歳を超え、賢明なドイツ社会を形成しているのだ。日本では京都でキンダーフィルムフェストが開催されている。機会を見つけて日本の未来を訪ねてみたい。

（名古屋学芸大教授、映画プロデューサー＝次回掲載は四月七日）